

脇本平也先生の最期

島 蘭 進

脇本平也先生が入院され、病状が思わしくないというお便りを井門富二夫先生からいただいたのは、2008年の9月25日頃だったかと思う。さっそくご家族にご連絡して、お見舞いにかがってよいものかどうかお尋ねした。よいとのご返事をいただき、すぐに平塚共済病院にうかがった。

2007年の秋から間質性肺炎で体調を崩され、すでに08年の春には検査入院をなさり、自宅で酸素ボンベを負われての療養生活だった。08年夏の酷暑にはひどく苦しまれたご様子だったが、ついに呼吸困難で意識不明になり、救急車で病院に運び込まれたのは9月23日の夜中のことだった。病院で治療を受けて、少し持ち直されると、すぐに井門先生にお電話をなさったようである。

脇本先生、井門先生、安斎伸先生、藤田富雄先生、柳川啓一先生、大塚喬清先生らは同年代でたいへん親しい間柄であった。お元気な井門先生にお電話をなさることで、諸先生やご遺族に、また一部の後輩や弟子筋にも情報が伝わることを意図されていたのではないかと思われる。後に分かって来たのだが、先生はこの世のすべてを手放し、親しい者たちに別れを告げて世を去るべく、周到に手はずを整えておられたようである。

先生はガンも併発されていたが、間質性肺炎が主なご病気だった。この病気は肺の機能が次第に悪化していき、呼吸困難が増悪して

来るもので、発病以来、死を覚悟しつつ苦しい闘病生活を送って来られたようである。リュウマチによる痛みにも苦しまれたという。しかもお宅では奥様のこれも容易ならぬご病状の看護をしつつの療養だったから、その厳しさは察するに余りある。

9月26日の夕方、お見舞いにかがうと思ったよりお元気で、やや驚かれたご様子だったが、闘病生活のことや思い出を含めた四方山話で1時間ほどお相手をしてくださった。そして、親しい方々にお見舞いに来るようにお知らせしてよいとのことだった。辞するとき、ふと涙ぐまれたように感じて、初めてこれは最後のお別れをなさるといってお考えであると察知した。

井門先生にお電話をなさったときから、そのおつもりだったと思われるが、お考えのとおり、その後、東大、駒沢大学、国際宗教研究所等の同僚・後輩や弟子たちが五月雨式にお見舞いにかがうこととなった。皆が言うことには、先生の頭はまったく衰えておらず、明晰そのものだった。だが、体力はだんだんと弱って行かれ、最後の数日には意識が混濁されたこともあったようだ。

脇本先生はこの年の手帳に毎日数行ではあるが、メモを記しておられた。ご遺族のお許しを得て、それを読ませていただいた。だいたいはごく簡単な記録であるが、時々、深い思念に及ぶ数行の記述がある。その手帳も、

10月6日頃から字を書くのに苦勞しておられる気配があり、14日をもっておわっている。10月24日にはご家族一同に見守られ、静かに最期を迎えられた。

ここでは、この先生の手帳からいくばくかの書き写しをさせていただき、死を前にされた先生のご心境をうかがい、追悼のよすがとしたい。

1月11日。お誕生日である。「ついに87才。父母を越える。特大ステーキ、赤ワインで祝杯。全員から祝いtel来。もはや思い残すことなしの観。」86才で亡くなった念佛者の父上のお葬式のお手伝いに、自由が丘のお宅にうかがったのをついこの間のように思い出す。全員というのは3人のお子様のご家族全員ということだろう。

2月4日のところにこうある。「とにかくどんどん捨てる、を始めたが、すぐ息切れして仕事を続けることが難しく、したがって捨てない」。恐らく、前年秋の発病後、早い時期に先生は死を覚悟し、「どんどん捨てる」態勢をとっておられたのだろう。

そういえば、この前後に先生からお電話があり、長年お務めになったNHKの宗教放送の委員を、代わって私が務めるようにご指示があった。お元気そうな声という印象で、そのように苦しいご病気を抱えておいでのことはまったく気づかなかった。まことにうかつな弟子である。

2月29日。「死ぬことの覚悟はついているのだけれど、その手前の苦しみや痛みを容受する覚悟は甚だおぼつかない」とある。呼吸の困難とともに関節や首や肩などの痛みもあった。ご家族の看護に伴う心身の痛みも容易ならぬものがあった。それは私などの想像を絶するものだったと思われる。

4月18日。21日に入院することが決ま

った翌日である。「要するに目の前の苦しきから解放されるということが直接の第一目標となって、やはり入院という次第。いい加減に死んだ方がよいと思えども、死に至るまでの苦しみに耐えることは残念ながら意志薄弱で俺には不可能ということらしい」。19日のメモは「やるべきことやる気力なし。終日新聞のみ」とある。

7月7日。ご家族の病状につき、「そこまで追い詰めたのは全く俺の責任。この過の罰当たりが今の俺に息苦しきとして出ているのだ！！東京物語「もっとやさしうしといてやりゃあよかったおもいますよ」

9月26日にお見舞いにうかがったとき、「仏教の神義論は救いにならない」という主旨のことをおっしゃった。こんな話はご家族にはなさないだろうから、私が来たので待ちわびたかのように話されたように感じた。

「キリスト教の方がうまくできている」ともおっしゃったが、これはつまり己にとって最終的に求めるものは、救いではないということでもあろう。

7月15日。「仏の教えとは、つまるところ、一切皆苦、涅槃寂靜、生きている間は苦しい、死んだら楽になりますよ、ということ」。

7月23日。「切迫で酸欠呼吸のときの俺の息使いは俺に叱られて泣く香世（島菌注——長女の香世子さん）の泣きじゃくりにも似たり。今あのときの罰が当たっているということだ！お袋の「あんた罰が当たるで」との戒め、なかなか有効」。

8月1日。「痛癢持ちの鬼のような爺いが毎日どなって、婆さんを泣かす。それでも婆さんは爺いの肩を揉みながら、「あなたの背中をさすってあげられて幸せ」という。これって、女房はやっぱり観音の化身？！胸の奥で合掌。」これは、若き親鸞が自らを捧げる観音の化身である女性の導きによって、決定

的な信仰体験を得たという、先生ご自身の著名な親鸞論の論旨を踏まえている。

8月7日。「絶対無限の妙用とは何か。これが現在の私の神義論。乗託などという曲芸がこの私にとれるのか、これが課題」。

8月25日、「いのち、いのち」と「いのち」の話、好評なれど、その「いのち」こそ渴愛煩惱の当体、一切皆苦の源由なのだ、いのちの絶えるを涅槃という、絶えるまで耐えるほかなし」。この短文では説明の困難なところもあるが、先生の仏教理解、死の覚悟に関わる思念は十分に伝わると思う。

9月3日。「家族のためにも早く死にたいと思うのも親心ならば、こんなに苦しむのならむしろ早く死んでほしいと思うのも子心なのだ。親子のいのちってつらいものだよ、これを一切皆苦という。」

9月19日。「絶対無限の妙用の風は吉福のみならず凶禍をもたらす暴風でもある。キリスト教はこれを試練といい、仏教はこれを因縁という。祖父様の「因縁じゃい」がやっとなったということか」。

「因縁じゃい」については、1997年刊行のご著書『死の比較宗教学』（岩波書店）に、心を揺さぶられる叙述がある。「一番悲しかったのは、五歳年上の兄の夭死であった。わたしが中学一年生のときである。母は、「わたしが代わってやりたい」といって泣いた。父方の祖父は、自分もぼろぼろ涙をこぼしながら、「因縁じゃい」といって母を慰めようとした。父は、長男だった兄の死を契機に、なにかが変わったような印象であった。朝晩、仏壇の前でお勤めをするようになった。怒って兄の頬を平手打ちしたことを悔いて、「わしが悪かった」と泣きながら謝った。その後、われわれ弟妹に体罰を加えることは、ピタッと止めた。」（3ページ）

では、「因縁じゃい」ということの意味を、

宗教学風に言いかえるとどうなるか。同じ書物に次のような叙述もある。「シャカの教説は、きわめて簡明である。一口にいえば、生への執着さえ断れば死は何でもない、ということである」。だが、浄土仏教系では、「生の時々刻々に、いわば生と相表裏して死を見ようとする流れも出る。無常の道理を微分化して、一瞬一瞬に生じかつ滅する過程として人間の生を考える」。（101ページ）

「このように思想のパラエティはあるが、仏教は一般的にいって、死を不条理と受けとめる感性に薄いように思われる。厳然たる定めとしての死の事実は動かしようがない。これを不条理と感じて、いまさらその意味を尋ねてみてもしようがない。むしろ不条理と感じたり、いやだとか恐ろしいとか感じたりする主観の側にこそ、問い直されねばならぬ問題がある。事実を事実として死を受け容れる心の持ち方こそ、尋ね工夫するべき問題なのである。こういった問題の立て方が、仏教の基本にはあるのではないかと思う。」（102ページ）

脇本先生の宗教学の背骨にあたるもの、脇本先生個人にとっての仏教の柱らしいものが浮かんでくる。最後の一年間、とりわけ苦しい病の日々、脇本先生は自らの学問の核心にある思想を問い返し、練り直しながら、日々を過ごしておられたことが分かる。

脇本先生がおられると、さまざまなわだかまりがほどける糸口が見え始め、濁った心が清められる思いをする機会が少なくなかった。そこに脇本流の仏教理解があり、宗教学理解があり、それを体得された人格の深みがあると感じていた。

だが、それは揺るぎない大安心というよりは、苦渋に満ちた精進のたまものでもあった。先生はそのような宗教性を体現し続け、練達の学者かつ求道者として静かに最期を迎えら

れた。享年， 87歳だった。

以上，幸い先生の手帳を読ませていただき，最後の教えを受けたように思ったので、『歎異抄』や『正法眼蔵随聞記』の伝統を思い起こしつつ，ご報告をさせていただいた。ただし，もともと誰かに向けて語られたわけではないお言葉である。

このように先生の私的なノートに記されたお言葉をお伝えするのは，それが脇本宗教学の理解にとって決定的な意味をもつ資料であると信じるからである。あの世の先生がそれをお許し下さるかどうかわからない。罰当たりの弟子はひたすら祈るばかりである。

お元気な頃の先生につき，多岐にわたるその学問業績につき，またお世話になった幾多のことにつき，ほとんど何も記さずにこの追悼文を結ぶことをご寛恕いただきたい。